

# 三島市長選 立候補者の横顔

近藤 こんどう

正文氏 まきふみ

無新 46歳

## 未来思い描く「戦略家」



仕事に赴いたジャカルタで目にした光景が忘れられない。大雨の中、ずぶぬれになって傘を売る子どもたち。近くのカフェでは大人が優雅にお茶を飲んでいる。「何かが狂っている」。社会のひずみを感じ、政治家として世の中を変えたいと思うようになった。

飲食店などを県内外で展開し、2013年に三島へ移り住んだ。人が穏やかで気候は温暖、自然も豊か。嫌いだった野菜は、三島に来てから大好きになった。そんな地元の魅力を感じる一方で、疲弊する地域経済には危機感を抱く。「この土地に根付こうと決めた。人任せにはし

たくない」。市長選に名乗りを上げた理由だ。政策の目玉に掲げるのが「ママもパパも医療費無料」。物価高騰のあおりを受けやすい子育て世代の支援を充実させ、ファミリー層を呼び込んで消費を活性化させる。現状は近隣市町に人口が奪われているとし、「駅前

再開発は順番が逆。まずは人が増えなければ商売は成り立たない。商人として、子を持つ親として三島の未来を思い描く。分析し、予測を立てる。戦略家。世界情勢から身近な出来事まで幅広く、「目の前のこみどろ捨てれば効率的か。考えて動けないこともある」。約30年前に始めたサルサダンスはスタジオを開業し、自己分析では「凝ったらプロになりたがる性格」という。

豊岡 ともおか

武士氏 ぶしし

無新 79歳

## 「人のつながり」大切に



小学生の頃に野球を始め、ボジションはキャッチャー。母校の三島高で野球部の監督も務め、指導した選手が後年に都市対抗野球の監督として対戦したのは忘れられない思い出。学校の校長、会社の社長などさまざまな場で一線に立つ教え子の活躍を喜び、あらためて「人の

つながり」を大切に思う。県職員だった1998年、生まれ育った三島市に派遣された。当時、病気で不在だった市長に代わって災害対応の指揮を執り、やがて三島を災害に強い町にすべく政治家を志す。オイルショック、湾岸戦争などの経済危機を県庁で経験し、県議を

経て市長に就任。国や県など幅広い人脈に支えられて務めた3期12年を振り返り、「自分ほど地方行政に詳しい人は三島にいない」と胸を張る。三島の地価は住宅地、商業地ともに県東部で1位になった。清らかな湧水と、街中を美しく彩る地域花壇。豊かな自然を生

かしたまちづくりは実を結びつつある。三島駅南口再開発と天場の区画整理事業を成し遂げ、三島に雇用を生み出して「みんなが笑顔になる町」を目指す。野球で培った体力は今も健在。1日1万歩を目標に歩き、約20年前に始めたラジオ体操は毎朝欠かさない。健康の秘けつは「よく歩き、よく食べ、よく寝ること」。人生100年の第4ステージは「三島にささげるつもりだ」。

石井 いしい

真人氏 まさと

無新 43歳

## 弱者に寄り添う政治を



政治家を志したきっかけは1歳上の兄の存在。満腹中枢に異常があり、身体的な成長が止まる障害「ブリーダー・ウィリー症候群」を抱えていた。「(兄より)先には死ねない」という母の言葉に、障害者を支える日本社会の在り方に疑問を感じた。「政治の力を変えなくては」

兄は障害が引き金となって肺に病気を患い、2014年に36歳で他界した。同じ年に祖母も亡くし、当時の東京から三島への帰郷を決意。初挑戦した18年の市長選で敗れたものの、翌年の市議選でトップ当選して政治の道歩き出した。大学卒業後の03年に勤め始め

た浜松市役所は当時、12市町村合併の手続きがまっただ中。学生時代に培った情報処理と防災の知識を生かし、各自治体から統合したシステムを7カ所の区役所に接続する業務を担った。この経験こそが、三島で地域拠点型のネットワーク市役所を目指す政策の根底になっている。

「机の前に座っているのは市職員の仕事ではない」。現場に足を運び、市民目線で課題に向き合う姿勢を何よりも大切にしている。そして、誰ひとり取り残さない「インクルーシブ社会」の実現。障害者、高齢者など弱者に寄り添う思いを常に政治の中心に据える。選挙戦では、スーツに運動靴で走り回る。「動きやすくていいんですよ」。現場主義を徹底して貫く。